

青木ガリレオ&出泉アン

ぼくが アンモナイト だった頃

“When I was an ammonite”
and other stories
by Aoki Galileo & Izumi Ann



ぼくがアンモナイトだつた頃。



あおき
青木ガリレオ

&

いずみ
出泉アン



So etwas gibt es nur im Märchen.
そんなことはおとぎ話の中でしか起こらない

目次

希望を買ってください | 7

悲しみのサンタマリア | 21

△□○すみれ党の反乱 | 41

湖面の月 | 75

母熊猫のお話 79

もう一つの母熊猫のお話 87

うんにゃ ————— 95

蝶が飛ぶ ————— 119

プロローグ 蝶の国のお話 120

本編 蝶が飛ぶ 126

エピローグ 主人公のいなくなってしまった短いお話

136

ぼくがアンモナイトだった頃 ————— 141

希望を買ってください

To be or to have, that is the question.
存在か、所有か、それが問題だ



暗い時代でした。

広がる闇の中、人々は何かを待っていました。ただ、あまりに長く待ちすぎて、待つものさえ、いや、待っていることさえ、わからなくなっている時代でした。

雪の降る寒い夜でした。

「希望はいりませんか。光り輝く希望はいりませんか」一人の青年があたたかい声を人々にかけてながら歩いていました。

「希望……」人々は青年の顔を一瞬見上げ、またコートの襟を立て、うつむきながら歩いていきました。

「希望はいりませんか」青年は繰り返し、繰り返し、行き交う人に声をかけていました。そのときです。

「その若者、ちょっと待て」青年のまわりを二人の黒装束の男が取り囲みました。

「おまえの持っている希望を全部出してもらおうか」第一の男が、革手袋につつまれた手を差し出しました。黒い革の手のひらに白い雪が落ちていました。

希望を買ってください

「持っている？　ぼくは希望を持ってはいません」青年は両手を広げ、首をかしげて答えました。

「おまえは今、希望はいりませんかと人に声をかけていたではないか」青年の少しおどけた態度に男の声も感情的になっていました。

「ええ、でも、ぼくは希望をモノのように持つてはいません。希望って持ち運びのできるものですか？」

「君と言葉遊びをしている時間はない。早く、君の持つている希望を出せ。ただでもらおうというのではない。きちんと、君の望む値段で買うのだ」

青年の襟口をつかもうとしていた第一の男をさえぎり、第二の男が煙草を吐きすて、青年に説明しました。

「買うって、希望が売って買えるのですか？　それに値段つて、いったいどうやって、希望に値段をつけるのですか？」青年は不思議そうな顔で尋ねました。

「議論をしている暇はない。とにかく、君の持つている希望を全部出さないさい。悪いことは言わない。私たちの言うことを聞くのも今のうちだ。これからは、個人で希

望を売ることは法律で禁じられる」

「ぼくには、あなたがたの言っていることがわかりません」

そこへ、いかにも理知的な第三の男が中に割って入りました。

「希望ほど難しい商品はない。にせものと本物の区別が、個人では判断がつかない。したがって、これを野放しにしておけば、恐ろしい詐欺的商売が生まれなともかぎらない。そこで、人々が安心して希望を買い取るように、国が希望を専売するのだ」
「ぼくには、あなたの言っていることがまったくわかりません。売って、どうやって売るのでですか？」

「国が工場で希望を生産し、統一的な価格で供給する。それが売るということだ」
「でも、どうやって希望を作るのですか？　　どういうふうに作ったら希望ができるのですか？」青年は三人の男たちの顔を順にのぞきこみました。

そのとき、三人の男たちは、お互いに目配せをして、何かを決定したようです。

「あっ！」青年は叫ぶ間もなく三人の男に取り押さえられてしまいました。青年の手首には、銀色に冷たく輝く手錠がかけられていました。青年は逮捕されてしまったの

希望を買ってください

です。

たった一週間の裁判で、青年に判決が下りました。

『個人による販売の禁止されている商品を販売したことにより、懲役十年の実刑に処す』それが確定した判決でした。

青年は法廷で最後まで「希望は売ることができるとはでしょうか？」という問いを繰り返していました。

懲役十年という刑は重いと人々は思いました。しかし、法律を破ったのは事実なのだから、しかたがない。誰もがそう思いました。法律自体が逮捕当日に公布されたことなど、誰も気づこうとはしなかったのです。ただ、「希望は売ることができるとはでしょうか？」という青年の声だけは多くの人の心に残りました。しかし、それもやがて時とともに忘れ去られていきました。

そして、十年の歳月が流れました。